

ボイス『聖セシリア祝日のオード』における詩と音楽

高 際 澄 雄

序

ウィリアム・ボイスはイギリス 18 世紀中期を代表するイギリス人音楽家であるが、1738 年（一説に 1737 年）と 1738 年に 2 曲の『聖セシリア祝日のオード』を作曲した。¹

『聖セシリア祝日のオード』といえば、イギリスではヘンリー・パーセルが 4 曲を書いていて有名だが、パーセルが 1683 年に作曲して以来毎年新しい歌詞と曲により演奏して祝典が行われていた聖セシリア祝日も、18 世紀に入ると、熱気が次第に薄れて、1703 年を最後に、その後の作曲は希になる。ハスクによれば、1708 年、1717 年、1723 年、1725 に行われたのみである。²

しかし、1736 年、イタリア歌劇の公演の不人気を補うためにヘンデルが、ドライデンの聖セシリア祝日のためのオード、『アレキサンドロスの饗宴』に作曲を行って、わずかながらこの種のオードが復活する。グリーンが主宰するアポロ協会で、上記ボイスが 2 曲を、フェスティングが 1 曲を作曲し、ヘンデルが 1738 年にもう一つのドライデンによる聖セシリア祝日のオード『和音から、天上の和音から』を作曲したからである。

ヘンデルが作曲のジャンルをイタリア歌劇からオラトリオに変える移行期の作品として、2 つの聖セシリア祝日のオードは重要な位置を占めるが、その人気に刺激されて書かれたと思われるボイスの聖セシリア祝日のオードとは、どのようなものであろうか。本論は、最初に書かれたヴィダルのオードに基づく作品を調べて、その特質を探りたい。

第 1 節 歌詞

ボイスの第 1 聖セシリア祝日のオードの歌詞となった詩作品を書いたヴィダルについては、ほとんどが知られていない。推測されているところでは、1702 年ころにロンドンに生まれ、ウェストミンスタースクールに学んだ。1719 年にケンブリッジ大学セントジョンズコレッジで学び、1721 年に聖職者となった。詩作品は、

この作品の歌詞となったオードしか知られていない。³

この作品は、1740 年に出版された『叙情詩集』の中に、アポロ協会が演奏した作品として、フェスティングが作曲したアディソンの詩と、1738 年にボイスが作曲したもう一つの聖セシリアオードのロックマンによる歌詞とともに、公表された。このオードは 4 連全 36 行と、オードとしては小品である。詩作品としては行の配置が大切なので、ハスクのテキストにしたがってその配置を示す。ハスクは 18 世紀の大文字使用は無視している。⁴

ODE FOR ST. CECILIA'S DAY

BY THE REV. MR. VIDAL

Set to Music by William Boyce.

THE Charms of Harmony display
Of Heaven's Omnipotence a ray:
Sov'reign queen o'er human Souls,
Each care, each passion she controuls;
On Earth she ev'ry pow'r can quell
And bring departed ghosts from hell.

If the hopeless Lover's Heart
Sinks down, oppress'd with Woe;
Dead'ned by the bleeding Smart,
The Stream of life runs low.
Music's healing Voice applied,
He hears away his pain;
Gently swells the Spirits's tide,
Then briskly springs again.

Where peace prevails and Plenty flows,
These blessings Harmony ensures,

Heightens the joy which peace bestows,
From Plenty new Delight procures.
In War's fierce Alarms
The bravest she warms.
By Music elate,
Nor fearing to die,
Though doubtful's their fate,
To battle they fly.
When the trumpet loudly calls
To arms, all terror falls;
Rous'd up, the very cowards,
Their fright in courage lost.

Yet is not Melody confin'd
To soothe the breast of human kind:
Her piercing sounds can quickly wing
Their flight to the Almighty King.
Cecilia sings and strikes the lyre;
Her melting notes with raptures fire;
Heav'n's gates fly open at her plaint,
And raise the Woman to a Saint.

詩形は、上記に明らかなように、ピンダロス風オードであり、各連ごとに韻律が異なる。

第1連は6行から成り、弱強四歩格で2行ごとに脚韻を踏んでいる。

第2連は8行からなり、奇数行が強弱四歩格、偶数行が弱強三歩格であって、脚韻も一行飛んで、韻を踏んでいる。

第3連は複雑である。全体で14行あるが、3つの部分に分かれる。最初の4行は弱強四歩格で、1行飛んで脚韻を踏んでいる。次の6行は弱強弱弱強の二歩格であり、韻は最初の2行が脚韻を踏み、次の4行が1行飛んで脚韻を踏んでいる。

る。次の４行は強弱四歩格と弱強三歩格が組み合わせられており、韻は２行ごとに脚韻を踏んでいる。

第４連は８行から成り、弱強四歩格で２行ごとに脚韻を踏んでいる。

このオードの意味は大体、次の通りである。

和音の魅力は神の全能を
一筋の光として示す。
人の魂に君臨する女王は
すべての気遣いと感情を統制する。
この世ではあらゆる力を鎮め
地獄からは旅立ちたる霊を連れ戻す。

絶望した恋人の心が
悲しみに打ちひしがれ
血の出るような痛みで死に瀕し沈み込むと
命の流れは弱まる。
音楽の声を癒しに用いれば
聞くだけで痛みが取れて
精気の潮はゆっくりと満ち
やがて再び力強く湧き生ずる。

平和で満たされ豊潤があふれるところ
和音がこれらの恵みを確保し、
平和のもたらす喜びを高め、
豊かさから新しい喜びを手に入れる。
戦いの荒々しい警告の調べで
勇者を励ます。
音楽で勇み立ち
死を恐れず
運命に迷いながらも

戦闘に向かう。

ラッパがやかましく

武器に急がせると、恐怖は全く消える。

臆病者たちも奮起して

恐れを忘れ勇気を得る。

音楽の調べは人の胸を

癒すに限られず。

その胸に響く音は素早く翼に乗り

万能の王のもとに飛翔する。

セシリアは歌いリラを奏でる。

人の心を溶かす歌声は歓喜を燃やす。

天国の門がその訴えで速やかに開き

その女性が聖人の位に登る。

詩作品として見れば、欠点がさまざまに見つかる。単語の選択が不適切である。書き出して、和音の示す「神の全能の一筋の光 a ray of Heaven's Omnipotence」とはどのようなものであろうか。想像するに難しい、無理な表現である。また最終連で、「セシリアの音楽は人の心を癒すだけではない」と聞いて期待するのは、神の心も和らげることであろう。ところが、天国に届くと、天国の門が開いて、セシリア自身を聖人に列するために、訴えを行う。セシリアは自分を聖人に列するという自己利益のために音楽を奏でるというのである。セシリアの名誉にはならないであろう。実際にセシリアが聖人に列せられたのは、その音楽の才能ではなく、熱烈な信仰心であった。当時の人はそれを知っていたので、違和感は感じなかったであろうが、表現に飛躍があり、十分に説得的ではない。

しかし、歌詞としてみれば、詩作品としての優越性が必要なのではない。作曲者にイメージを与えることがまず大切なのである。すでにこれはドライデンが1686年の聖セシリア祝日のオードで、模範的に示したところであった。ドライデンはさすがに言葉の選択においても、意味においても、立派な作品を書いているが、第一に示したのは、そのイメージであった。音楽の効用を具体的に説き、楽

器と結びつけた。ヴィダルはこのお手本に従っている。語の選択や、説明としての詩の展開に無理はあるが、イメージは作曲者に十分与えている。音楽の根本的な機能を語ったのち、恋愛における音楽の癒しの力、平和な社会での平和と豊かさを増進させる力、戦いで励ましの力、そして神の国とこの世を結ぶ力、こうしたものを具体的に示しているのである。歌詞としては、十分に優れた作品だと言えるのである。音楽作品の出来映えは、もっぱら作曲者に委ねられているというべきであろう。それでは、ボイスはどのような音楽作品に仕上げたのであろうか。

第2節 音楽

ヴィダルの歌詞を、ボイスはつぎのように処理して音楽オード作品とした。まず第1連を合唱にあて、第2連をアルト独唱に、第3連の最初の4行を三重唱とし、残りをバス独唱とした。第4連は最初の4行をレシタティーヴとして、次の4行を合唱で結んでいる。そして序曲にアレグロとメヌエットを加えた。さらにどのような音楽となったかを表にして示す。⁵

曲番	詩連行	楽曲形態	演奏形態	伴奏	演奏時間
1		序曲（アレグロ/ モデラート・メヌ エット）	オーケストラ全奏		1'27"+0'20" 4'29"
2	I	合唱	四部合唱	オーケストラ全奏	2'47"
3	II	アリア	アルト	弦楽、通奏低音	2'43"
4	III. 1-4	三重唱	ボーイソプラノ、テ ナー、バス	弦楽、通奏低音	3'43"
5	III.5-14	アリア	バス	オーケストラ全奏	4'47"
6	IV. 1-4	レシタティーヴ	バス	通奏低音	0'27"
7	IV. 5-8	合唱	四部合唱	オーケストラ全奏	2'17"

オードは、快活な序曲で開始する。その速度は急速であり、推進力がある。ヘンデルの曲に比べれば、荘重さはないものの、明るく整っている。いかにも新古典派の幕開けを感知させる音楽である。曲は最初から繰り返され、やがてモデラ

ートの接続部に移る。ここは速度とともに、音量も落としている。そのために弦楽のみの演奏となっている。

序曲の第2部であるメヌエットは、典型的な形式をとっており、3拍子でAABBCCABの三部形式である。Cの部分はトリオであり、出だしのバイオリン、ビオラ、チェロの繊細な響きが美しい。

第2曲は、合唱であるが、最初の2行が和声法で書かれ、次ぎの2行が対位法で書かれている。そして再び、最後の2行で和声法に戻る。詩の展開は次ぎの通りである。^{6**}で表した部分は、対位法による部分である。

The charms of Harmony display
Of Heaven's Omnipotence a ray,
Of Heaven's Omnipotence a ray:
**Sov'reign queen o'er human souls,
**Each care, each passion she controuls;
**Sov'reign queen o'er human souls,
**Each care, each passion she controuls;
On earth she ev'ry pow'r can quell
And bring departed ghosts from hell.
On earth she ev'ry pow'r can quell
And bring departed ghosts from hell.
**Sov'reign queen o'er human souls,
**Each care, each passion she controuls;
**Sov'reign queen o'er human souls,
**Each care, each passion she controuls;
On earth she ev'ry pow'r can quell
And bring departed ghosts from hell.
On earth she ev'ry pow'r can quell
And bring departed ghosts from hell,
Bring departed ghosts from hell,
Bring departed ghosts from hell.

最初の 2 行の合唱は堂々とした和声法による歌曲となっている。続く対位法の部分は、4 声であり複雑な響きとなっている。そして再び和声法に戻るがここは急速であり、さらに対位法が繰り返されて、和声法で輝かしく結ばれている。

第 3 曲は、やや憂いを帯びた弦楽の前奏で始まる。歌詞の展開は次の通りである。下線を施した部分はメリスマ唱法で歌われる。

If the hopeless lover's heart
Sinks down, oppress'd with woe;
Dead'ned by the bleeding smart,
The stream of life runs low,
The stream of life runs low.
Music's healing voice applied,
He hears away his pain;
Gently swells the spirit's tide,
Then briskly springs again,
Then briskly springs again.
If the hopeless lover's heart
Sinks down, oppress'd with woe;
Dead'ned by the bleeding smart,
The stream of life runs low,
The stream of life runs low.
Music's healing voice applied,
He hears away his pain;
Gently swells the spirit's tide,
Then briskly springs again,
Then briskly springs again,
Briskly springs again.
Gently swells the spirit's tide,
Then briskly springs again,
Then briskly springs again,

Briskly springs again.

男声アルトにより歌われるこの楽曲は、前半が緩やかな憂いを帯びた旋律を持ち、後半が急速な喜ばしい旋律を与えられている。そして、最初から繰り返され、最後の部分がさらに繰り返されて終わる。形式はパーセル時代に似るが、バロック盛期の対照的効果を十分に生かした曲となっている。

第4曲は、ボーイソプラノ、テナー、バスの三重唱であるが、歌詞は次ぎように展開されている。

Where peace prevails and plenty flows,
These blessings harmony ensures,
**Heightens the joy which peace bestows,
**From plenty new delight procures.
**Heightens the joy] which peace bestows,
From plenty new delight procures.
Where peace prevails, where peace prevails
These blessings harmony ensures,
These blessings harmony ensures,
**Heightens the joy] which peace bestows,
From plenty new delight procures.
**Heightens the joy.] which peace bestows,
From plenty new delight procures.
**Heightens the joy, the joy, the joy,] which peace bestows,
From plenty new delight procures, new delight procures,
From plenty new delight procures.
Where peace prevails and plenty flows,
These blessings harmony ensures,
Heightens the joy which peace bestows,
From plenty new delight procures, new delight procures,
From plenty new delight procures, new delight, new delight procures.

最初は2行をボーイソプラノが歌う。続いて、テナーが加わって、簡単な対位法を展開する。続いて、バスが加わり、ボーイソプラノとテナーが組んで、バスと対位法を展開し、次にバスとテナーが組んで、ボーイソプラノと、続いて、バスとボーイソプラノが組んでテナーと、対位法を展開する。最後にボーイソプラノ、テナー、バスが第1行、第2行、第3行をそれぞれ歌って、最後に第4行を主として和声法で、展開して、最後に弦楽でリトルネロを演奏して曲を結ぶ。この楽曲は、17世紀後半のオードの典型であり、弦楽の伴奏によっていることもあって、きわめて繊細な音楽となっている。

第5曲は、バスによる独唱であり、前半は弦楽、後半はオーケストラ全奏による伴奏で、きわめて激しい、急速な楽曲である。形式はダカーポ・アリアとなっているので、繰り返しのA部は省略すると、歌詞の展開は次のようである。

(A)

In war's fierce alarms

The braves, the bravest, the bravest she warms,

By Music elate,

Nor fearing to die,

Though doubtful's their fate,

To Battle they fly, they fly,

Though doubtful's their fate,

To battle they fly,

In war's fierce alarms

The braves she warms, the bravest, the bravest, the bravest she warms,

By Music elate,

Nor fearing to die,

Though doubtful's their fate,

To Battle they fly, to Battle they fly,

By Music elate,

Nor fearing to die,

Though doubtful's their Fate,

To battle they fly, to battle they fly,
By Music elate,
Nor fearing to die,
Though doubtful's their fate,
To battle they fly,
Though doubtful's their fate,
To battle they fly,

続く B 部は、弦楽に金管とティンパニが加わり、さらに楽曲は力強くなる。歌詞の展開は次ぎの通りである。

(B)
When the trumpet loudly calls
To arms, all terror falls, all terror falls, all terror falls;
Rous'd up, the very cowards lost,
Their fright in courage lost,
The very cowards lost,
Rous'd up, the very cowards lost,
Their Fright in courage lost,
Their Fright in courage lost.

歌詞は再び A 部に戻り、同じく展開される。

第 6 曲は、最後の連の最初の 4 行がレシタティーヴで歌われるが、最後の Almighty King が強調されているところが特色である。

第 7 曲は、合唱によっているが、対位法が使われず、和声法によってのみ作曲されているところが、この時期の終曲としては珍しい。歌詞の展開はつぎの通りである。

Cecilia sings and strikes the lyre;
Her melting notes with raptures fire.
Her melting notes with raptures fire

Her melting notes with raptures fire, with raptures fire;
Heav'n's gates fly open, fly open at her plaint,
And raise the woman to a saint,
And raise the woman to a saint.,
And raise the woman to a saint.
Cecilia sings and strikes the lyre;
Her melting notes with raptures fire.
Her melting notes with raptures fire
Her melting notes with raptures fire, with raptures fire;
Heav'n's gates fly open, fly open at her plaint,
And raise the woman to a saint,
And raise the woman to a saint,
And raise the woman to a saint,
And raise the woman to a saint.
Heav'n's gates fly open, fly open at her plaint,
And raise the woman to a saint,

ほとんどが四声部合唱であるが、ところどころ、テナーとボーイソプラノとなり、わずかに対照が生まれる。しかし、急速で力強く、短時間で結ぶところにこの楽曲の特色がある。

全体として、ヴィダルの歌詞の短さを逆に特色としたところが、音楽としても魅力となっているというべきであろう。

結び 古さの中の新しさ

イギリス最初の聖セシリア祝日のオードと思われるパーセルの作品もまた短く、パーセルの 1693 年の作品と比べても、またヘンデルの 2 曲と比べても、規模が小さかった。しかしこの作品が魅力をもっているのは、全体に生気が溢れており、隅々まで工夫の行き届いた芸術性が、聞く者に音楽の喜びを与えてくれるからである。1736 年のヘンデルの聖セシリア祝日のオード『アレクサンドロスの饗宴』は言うまでもなく偉大な作品であるが、イギリス本来の歌詞を重視した美しさという点では、問題がないわけではない。ヘンデルにはむしろ言葉をも越える精神の高みを最終的に目指していると思われるところがある。

ボイスは、まるでヘンデルの第 1 聖セシリア祝日のオードに対抗するかのよう、小さな作品をまず書いて見せたように思われる。この音楽の演奏時間は 23 分を少し越す程度で、『アレクサンドロスの饗宴』には比較のしようもないが、教会での礼拝も含んでいた聖セシリア祝日の儀式からすれば、パーセルの最初の聖セシリア祝日のオードに戻ったというべきであろう。

しかし、音楽は当然新しい。序曲の澆刺とした響き、合唱の和声法による表現、ほとんどメリスマ唱法に頼らない歌唱法、ダカーポアリアの一度だけの使用など、すでに盛期バロック様式を脱して、ハイドンやモーツァルトの古典主義を予兆させる音楽が使われていることに注目すべきであろう。ヘンデルの偉大さは疑いようがない。しかしイギリスの音楽としては、すでにヘンデルの様式から脱しようとする動きが始まっていた。本作品もその一つの動きを進める作品であったことは、間違いがない。イギリス人による音楽は、ヘンデルに刺激されて、新しい歩みを始めていたのである。

(本論は、平成 18-20 年度科学研究費補助金研究『18 世紀イギリスにおける音楽と詩』(課題番号 18520171) の成果の一部である。)

註

1. Ian Bartlett, 'Boyce's Homage to St Cecilia' (*Musical Times*, Vol. 123, 1982) pp. 758-761.
2. William Henry Husk, *An Account of the Celebrations on St. Cecilia's Day* (Bell and Dally 1857).
3. Robert J. Bruce, English Panphlet of the CD Wiiliam Boyce *David's Lamentation over Saul and Jonathan* (ASV Lit. GAU 208) p. 2.
4. Husk, Op. cit., pp. 219-221.
5. 音楽は、Graham Lea-Cox 指揮 The Hanover Band の演奏によっている (CD *David's Lamentation over Saul and Jonathan* ASV Lit. GAU 208)。
6. 歌詞の展開も上記 C D の演奏によっている。